

芭蕉と甲斐の地域文化

(財)山梨総合研究所評議員 伊藤 洋

俳聖松尾芭蕉が都留に住んでいたことがあるということが、山梨県内でもあまりよく知られていないようです。まして、谷村から江戸に戻った彼が急激に詩人としての高みに駆け上っていったことなどは全く知られていません。ここでは、芭蕉の山梨滞在の前と後を検証しながら、ここで一体何があったのか想像してみようと思います。

芭蕉が、29歳で江戸に出て来て、努力の末に俳諧宗匠として「立机」したのは延宝5年(1677)35歳の時でした。ところが、ようやく見つけた出世の道を、延宝8年の冬にはあっさり棄て、隅田川と小名木川の合流地点、深川「三股のほとり」に隠棲してしまいました。なぜ芭蕉は「間口千金」と言われる繁華な江戸日本橋を後にして、およそ流行俳諧師にとって致命的とも思われる辺鄙な地へ転居を敢行したのでしょうか。これは、今でも謎ですが、これについて話し始めると長くなりますので別のところに譲ってここでは触れないことにします。

第一次芭蕉庵と呼ばれる草庵は、弟子で将軍家御用達魚問屋杉山杉風の鯉や鰻を貯蔵しておくための生簀の番小屋だったと言われています。これは相当に粗末なものだったようです。それでも、明けて翌延宝9年(天和元年)の春には門人李下が芭蕉一株を植えてくれて、殺風景の中にも多少の彩ができました。(これを機に俳号を桃青から芭蕉へ替えました。)

しかし、ここに落ち着く間もなく、その翌天和2年(1682)の暮も押し詰まった12月28日、江戸市中から上がった火の手は、神田、日本橋は言うに及ばず大川を隔てた本所・深川までのびて、城東一帯を焼き尽くしてしまいました。これを人呼んで「八百屋お七の大火」というのですが、この火事を起こしたのが八百屋お七だったのではなく、お七が駒込に疎開をして恋に陥ったもととなった火事がこれだったと言われています。(お七が放火を図り、磔にあったのはいずれも明けて天和3年3月のことでした。)

ともあれ、この大火で芭蕉は焼け出されてしまいました。年の瀬のこととて大変な災厄ですが、捨てる神があれば拾う神もあり、早々に、甲斐国都留秋元家の国家老高山伝右衛門繁文(俳号麿峙^{びし})(1649~1718)が、拾う神となって芭蕉を谷村に迎えます。爾来約5ヶ月間、芭蕉は都留に滞在しました。

谷村で麿峙が与えてくれた滞在環境は万卷の書に囲まれるという、それまで芭蕉が経験

したことの無いハイソなそれだったと思われます。芭蕉は、伊賀で仕えた藤堂新七郎家の嫡男良忠（俳号蝉吟）とは俳諧マニアとして意気投合はしていたものの身分の開きは如何ともし難く、主家の文庫を覗くことなど許されるはずも無く、またこれと云って学習機会の無かった芭蕉にとって、弱点は一般教養の不足でありました。麁埒が差配する秋元家の文化的環境は優れたもので、芭蕉はここで一心不乱に勉強したものと思われます。

天和3年の5月、江戸に戻りました。戻ってはみたものの草庵は無いので、友人山口素堂が勧進元となって、芭蕉庵再建の募金を呼びかけました。その文章『芭蕉庵再興の勸化文』^{かんげ}には、次のようなことが書かれています。

「(前略) 廣くもとむるは其おもひやすからんとなり。甲をこのまず乙を恥ること勿れ。各志のあるこゝろに任すとしかいふ。之を清貧とせんや將た狂貧とせんや。翁みづからいふ、ただ貧なりと。貧のまた貧、許子の貧、それすら一瓢一軒のもとめあり。雨をさへ風を防ぐそなへなくば鳥にだも及ばず。誰か忍びざるの心なからむ。是れ草堂建立のより出る所也。 天和三年秋九月 山口素堂」

素堂一流の機知あふれる文面に応えて金品を届けてくれた人52人、総額140匁が集まりました。これは現代の貨幣価値に直すと13万円程度。これによって建て直された第二次芭蕉庵の粗末さは容易に想像できます。勸化文中にもあるように、この頃から始まった芭蕉の乞食趣味、「風狂」スタイルはついに終生のものとなりました。その風狂の行き着く場所が『奥の細道』でした。

ここに登場した二人の人物、麁埒と素堂はともに甲州の人でした。中でも山口素堂は、異説もありますが、現北杜市白州町教来石に山口市右衛門の長男として生まれ、甲府魚町で家業の酒造業を営んでいましたが、向学の心やまず、家督は弟にゆずり、漢学を林春斎に学ぶために江戸に出たと言われています。儒学・書道・能楽・和歌・漢詩など古今の学に通じた当代きっての市井の教養人でありました。芭蕉より2歳年長ですが、芭蕉が死出の旅に出た元禄7年の初夏まで、お互いに信頼しあって兄弟のような交わりを致しました。「目には青葉山ほととぎす初がつほ」は人口に膾炙した素堂の名句です。

さて、谷村疎開当時の芭蕉の記録はほとんどなく、この時期の作品としては、『夏野の画讚』が唯一といってもよいほどです。「笠着て馬に乗りたる坊主は、いづれの境より出でて、何をむさぼり歩くにや。このぬしの言へる、これは予が旅の姿を写せりとかや。さればこそ、三界流浪の桃尻、落ちてあやまちすることなかれ。」という詞書に続いて、「馬ぼくぼく我を絵に見る夏野かな」がそれです。この句は、「甲斐の郡内といふ処に至る途中の苦吟」という詞書を付して「夏馬ぼくぼく我を絵に見る心哉」（『俳諧一葉集』）を初案として推敲していったものです。

芭蕉は、深川に隠棲した延宝8年(1680)以後、一世を風靡した談林俳諧から決別して、漢文調で内省的な作品へと大きく変化してはいました。しかし、ややもすると談林俳諧への回帰も見られたのです。しかし、この句を境にもはや後戻りすることはありませんでした。

江戸に戻った翌年の貞享元年秋、芭蕉は「野ざらしを心に風のしむ身かな」と詠んで、『野ざらし紀行』の旅に出発します。先年身罷った母の菩提を弔う目的もありましたが、自ら創始した天和調俳諧を世に問う「野ざらし」覚悟の旅でした。その旅中に、後世、蕉風と呼ばれる詩の世界を発見・創造することとなります。これは、日本文学史上画期の大事件であったと言っていいでしょう。

この時期における芭蕉の大ブレイクを促したのは、深川臨川庵の佛頂禅師による教化と谷村における古典との出会いだっただけではないかと思われます。これらによって40にして芭蕉は世界の詩人に「豹変」できたのです。半年に及ぶ芭蕉の谷村滞在にはほとんど記録が残っていませんが、これは彼が外出もせずに猛勉強していたためなのだと、筆者は想像しています。

世界の詩人、俳聖松尾芭蕉の人生に甲州の地は大いにかかわっていました。当時の徳川植民地の甲州では唯一秋元家の谷村などに文化の集積があっただけでしたが、たまたま蕉門の熱心な弟子がそこにいたという偶然が幸いしたのでしょう。しかし、秋元家が川越に転封されると、それも昔語りとなりました。地域文化の大切さとはかくの如きものです。地域の活力を生み出すためには、産業政策だけでなく、それを醸成する文化政策が必要です。

芭蕉は、『野ざらし紀行』の帰路、木曾街道から甲州街道を經由して江戸へ下る途次、再度都留に立ち寄りしました。その折の「山賤のおとがひ閉づる^{やまがっ} 律^{むくら}かな」と「行く駒の麦に慰むやどりかな」の名句2句を加えて、甲斐の国で蕉翁が読んだ名句は全980余句の中から三つになりました。